



ミツバアケビ

一枚の葉が三つの小葉に分かれるアケビです。葉の縁はでこぼこし、波打っています。アケビの中では一番甘みが強く、サイズも大きいです。一枚の葉が五つに分かれるのが「アケビ」です。両者の雑種が「ゴヨウアケビ」です。アケビによく似たものに「ムベ」がありますが、果皮は熟してもアケビのように割れません。

目 次

巻頭言	2
「日々成長する教師に」	教育研究所長 大場 得信
1 小さなころみ	3
「学校ホームページを有効活用するために」	学校情報の発信に関する研究員
2 学びの架け橋	4
「児童生徒一人一人が輝ける道徳の授業」	道徳 プロジェクト研究員
3 ある教室から	5
『分かる』を実感できる授業」	教育指導課指導主事 綾部 敏信
4 研究所だより	
① 教育講演会	6
② 自然観察会	7
③ 尊徳学習研修会	8
④ 今後の教育研究所事業	8



教育研究所 共同研究

教育研究所長

大 場 得 信



誰もが初任者としての経験を持つ。そこからスタートして「一人前の教師」となり、さらに「優れた教師」をめざすことになる。しかし、そのための道程は決して平坦ではない。校内外での様々な研修、日々の実践等を積み重ねて目標に近づいていく。教師が成長するためには、「心の持ちよう」が大事である。このことを世阿弥の言葉を引いて述べる。

○ 初心忘るべからず

ここでいう初心を「教師に成り立ての頃の気持ちを忘れないように」というように受け取るのでは意味を十分捉えていない。世阿弥の言葉はさらに「時々の初心忘るべからず」「老後の初心忘るべからず」と続く。何歳になっても、何年経験しても、それぞれの段階での初心がある。この「時々の初心」が「主体的に学び続ける教師」を育てる。

○ 離見の見（りけんのけん）

これは、客観的に見られた自分の姿（離見）を自分自身の目で見ることであり、自分の目が能を見る観客の目と一致することの重要性を述べている。そのために「目前心後」（「目を前に見て、心を後に置け」と説き、自分の目で見ることができない後姿をどう見るのかと問う。世阿弥は、極限まで自己を客観視したのである。子どもや保護者、他の教員から見た自分の姿、客観的な姿を知ることが連続的な省察を呼び起こす。省察を繰り返す中で教師は成長していく。

しかし、「心の持ちよう」だけで、教師として成長できるわけではない。それをエネルギー源として、具体的なアクションを起

こす必要がある。具体的にどうすれば実践的指導力を身に付けることができるのか、断片的だが、優れた教師から、次のことが浮かび上がる。

1 授業を積極的に公開し、「白熱の議論」から学ぶ

授業を他に晒し、その目を通してどこまで自分を客観視できるか、そして、白熱の研究協議から多くのことを学ぶ。失敗を恐れず、何度でも授業を公開し、授業研究を重ね、議論の中の指摘を生かして「授業改善」に確実に繋げることである。

2 先輩や先進事例のよさから学ぶ

先ずは「よさ」をそのまま真似てみる。ただ真似るだけではなく、そこに一般的な理論を見出す。そして、自分なりの工夫を凝らし、自分のスタイルを創っていく。そのスタイルが独善的にならないようにするためにも、「時々の初心」や「離見の見」が大事になる。

3 一人ひとりの子どもの姿や日々の実践から学ぶ

子どもの反応を敏感に捉えて即時に分析し、適切な手立てを講じていくためには、先ず子どもとできるだけ多く関わり、子どもを「みとる目」を培うことである。そして、日々の実践を丁寧に積み上げていく中で、教師としての「気づき」に磨きをかけていく。



学校ホームページを有効活用するために

学校情報の発信に関する研究員

八木規孝（大窪小学校） 矢島 淳（下中小学校）

坂井卓矢（山王小学校）

渡邊 仁（国府津中学校） 堀 祐樹（城山中学校）



1 研究目的

平成25年11月に市内小中学校に教育ネットワークシステムが導入され、学校ホームページ作成支援システムの運用も2年近くが経過した。本研究では、昨年度から2年計画で、学校ホームページを有効に活用して、効果的に情報発信を行っていく方策を探っていくことにした。

2 実態調査

研究1年目は、各校のホームページ作りの現状を把握することから始めた。効果的に情報発信を行っている先進校の事例を調べたり、家庭でどの程度学校ホームページを閲覧しているかをアンケート調査したり、各校がどのような校内体制でホームページ作成を行っているのかといったことを調査したりした。

保護者アンケート調査の結果、学校のホームページを見たことがない保護者が半数を占めた。さらに、見たことがないと答えた保護者のうち半数は、自分の学校のホームページがあることを知らなかったという回答だった。

ホームページ作成に関わる学校状況調査の結果からは、各学校で苦勞しながらなんとか工夫してホームページ作成を行っている様子が伝わってきた。

3 研究内容

実態調査の結果を踏まえ、研究内容を次のように定めて研究を深めることにした。

(1) 校内体制の充実に向けた実践

学校ホームページをより多くの保護者に見てもらうためには、学校ホームページの存在をPRして認知度を上げていく必要がある。また、定期的・継続的に見てもらえるようにするためには、ホームページの内容がタイムリーに更新されている必要がある。

学校ホームページの内容を充実したものにするためには校内体制作りが欠かせない。掲載する情報を誰が集め、更新作業をいつ行うのか。更新作業のスキルをどのように高めて

いくのか。全職員の協力なしに継続してホームページの充実を図っていくことは難しい。

そこで、年度始めの職員会議で担当からどのような提案をしていったらよいか。また、ホームページ作成に関する校内での研修をどのように進めていったらよいか。さらに、見やすく役立つホームページの構成例なども検討していく。

(2) 児童生徒が学校ホームページに関わる

実践

より多くの方が学校ホームページを見たいようなページ作りの一つの要素として、児童生徒からの発信というのも有効である。個人情報扱いや情報モラルに関する指導は十分に行う必要があるが、児童生徒の発表活動の場として、Web ページは非常に有効な手段の一つである。授業の中で児童生徒が学校ホームページを有効に活用していく方法を考えていく。

(3) 小中、地域の連携を大切にしたい実践

通常、学校のホームページを閲覧しているのは、その学校に通う児童生徒の保護者が大半と思われる。しかし、Web ページの良さは、学校という閉じた世界から、外へ向けて扉を開くことである。同じ中学校区の学校同士、さらに、地域の諸団体ともつながっていくことができると、学校ホームページをきっかけとして、地域コミュニティが一体となった教育活動への足がかりとなるだろう。そのためにも学校としてできることを探っていく。

4 結び

学校ホームページの作成で、負担感よりプラス効果が実感でき、各学校現場で充実した内容のホームページ作りが継続的に進められるようになるために、本研究が役立ってくればよいと考えている。





児童生徒一人一人が輝ける道徳の授業

～小・中連携を通した発問・展開の工夫～

道徳 プロジェクト研究員

大澤ひかる（千代小学校） 長澤孝江（久野小学校）

中村絵里（片浦小学校）

新妻和音（千代中学校） 大井美佳（橘中学校）



はじめに

昨年度から「児童生徒ひとりひとりが輝ける道徳の授業」というテーマを設定し、研究に取り組んでいる。道徳の授業では、子どもたちがあまり深く考えず、分かりきった答えを当たり前のように言って、終わってしまうことが多い。そこで、子どもが自然に「考えたい・自分の思いを伝えたい」と思える発問を設定していきたいと考えた。

また、小学校、中学校それぞれ横のつながりはあっても、小中の連携が今までなかったため、「小学校・中学校でどのような道徳の授業をしているのか」といった疑問が挙がった。そこで、昨年度は互いの授業の実態を把握するため、それぞれ授業公開を行い、成果と課題を検討しながら確認し合うことにした。授業前には、研究員全員で指導案検討、授業後には、研究協議を行い、発問が有効であったかどうかや展開の工夫がされていたかなど考えながら研究を進めた。

研究の方法

1 指導案検討

実施する1つ前の研究日に、授業者が本時で扱う資料と略案を持参した。そして研究員一人一人が資料を読み込み、発問の箇所や内容、またその展開が価値に迫れるものになっているのかを検討した。

2 授業実践

小中学校の授業の実態を把握するため、研究員全員がそれぞれ授業公開を行い、成果と課題を確認した。

【それぞれの授業の協議事項】

①「くまさんのなみだ」小学校1年

最初から最後まで、立ち止まらずに流れていた感じだったので、一つのところでじっくり考えさせる場面があってもよい。

→児童の実態や経験から判断する。

②「車内の携帯電話のご使用は…」中学校1年

中学校と小学校の道徳の授業では、相違点がある。小6から中1へのギャップを少なくするために、小学校では中学校

の資料を使ってみたり、賛成反対カードを導入したりする。中学校では、板書に絵などを取り入れる。

③「最後のおくり物」小学校6年

中学校でも使える資料。中学生だと、「他人にこんな大金を渡すなんて、おかしい。」など、もっと本音の意見が出てくるかもしれない。

→なぜ？と問うと、より深く考えられるのではないか。

④「まかせてみようよ」小学校5年

道徳ノートを活用すると、一人一人の価値の深まりが分かる。振り返りや、家庭との連携にも活用できる。

→授業中に書くことだけに集中しないよう、工夫が必要。

⑤「ブッタとシッタカブッタ1」中学校3年

導入の工夫は、小学校も中学校も同じ。児童生徒の実態を考えて、授業に惹きつけるような工夫をしていきたい。（事前アンケートの結果の活用、視覚的資料の提示など）

おわりに

昨年度は、小中で連携してテーマを設定し、同じ目標に向かって取り組んだことで、児童生徒の思考の幅の広がりを感じることができた。発達段階が違うことで、資料の選定に違いはあるものの、導入部分で事前アンケートや視聴覚教材を活用することなど、共通する部分も多くあった。

今年度は小中の共通点をさらに見つけ出し、児童生徒の実態を踏まえて、授業に惹きつけるような工夫を考え、研究を深めていきたい。

その方策の一つとして、道徳ノートの活用がある。一人一人にノートを用意し、授業の中で考えたことや感じたことを書き込んでいく。年間を通して扱っていくことで、道徳の評価にも役立つのではないかと考えている。

また、小学校と中学校の道徳の授業の資料を交換したり、同じ物を扱ったりしていくことも検討している。今後も、小学校から中学校へのスムーズなつながりを意識した研究を進めていきたい。



「分かる」を実感できる授業

教育指導課指導主事
綾 部 敏 信

先日、こんな授業に出会いました。

ある小学校の2年生の算数で、引き算の単元でした。授業開始のあいさつや人の話を聴く姿勢、言葉遣いなど授業規律はもちろんのこと、みんなが安心して生活できる学級風土のある素晴らしい学級です。

導入で提示した問題は「みんなで遊んでいました。9人来たので30人になりました。」で、ここから分かっていない部分は何かを見つけ、それをテープ図で示し、立式するという、逆思考を用いた引き算の授業でした。「個人思考→グループ交流→個人思考→全体交流」という流れを用い、研究テーマとなっている『「分かる」を実感できる授業づくり』に迫る授業提案でした。

授業は順調に進み、問題をテープ図で表すという段階で、自分で考えたテープ図をグループで交流する場面となりました。ここでは少人数による言語活動がしっかりと展開され、人の考えを聞き、自分の考えを修正する児童もいました。

次に全体交流に進みました。何人かの児童が自分の考えを黒板に書き、多くの児童の発言により全体交流が進んでいきましたが、ここでもどうしても納得できないという児童が現れました。この児童の発言により、他の児童数人も納得できないと言いはじめました。指導案では、このあと立式に移る予定でしたが、そのまま全体交流が続けられ、授業が終了するまで、全員で課題解決に取り組みました。

この日の放課後の研究協議では、なぜ指導案どおり進めなかったのか、どんな指導の工夫があれば本時の目標を達成できたのかなど熱心に協議がなされました。私も同

様に考えましたが、一方で次のようにも考えました。

テープ図の全体交流の場面で授業者の先生は、「思ったよりも児童の到達度が低く、理解が進んでいない」という評価を行い、その評価を基に「立式に進まず、このまま全体交流を継続しよう」とその後の指導を修正したのです。確かに、計画通り進まなかったのですが、本時の目標がすべて達成できたとは言えません。だからといって児童の実態を無視して予定通りに授業を進めても、それは目標を達成したことにはなりません。とにかく、校内研究などの提案授業では、どうしても指導案どおりに進めたいという気持ちが出てしまうものですが、今回の授業者の先生は、それよりも児童の実態を最優先に考え、指導計画を修正するという子どもの実態に即した授業を実践したのです。

指導のあるところには常に評価があります。この授業のように、授業中の評価を指導に活かすことは、大切なことであると改めて感じました。

この先生の授業中の判断は正しかったと私は思うのと同時に、研究協議で、なぜ計画通り進まなかったのかについて真剣に分析し、次の授業に活かそうとする先生の姿が頼もしく思えました。

授業中納得できないと言っていた児童の授業後の晴れやかな表情が今でも印象に残っています。





親だからできること～子育ての落とし穴～

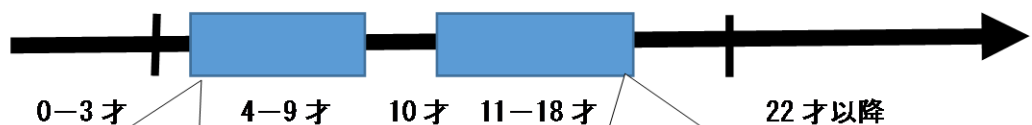
花まる学習会 高濱正伸 氏



平成 27 年度の教育講演会に、花まる学習会の高濱正伸氏をお迎えし、「親だからできること～子育ての落とし穴～」という演題でご講演いただきました。高濱氏は、自身の豊富な体験を基に、表現力豊かにお話してくださいましたので、小田原市、足柄下郡の保育園、幼稚園、小・中学校の教職員のみなさんの心に深く響いたのではないのでしょうか。子ども達への支援のヒントを、たくさんいただいた講演会でした。

メシが食える大人に育てるために

○子どもの特性を「時間軸」で考える



“オタマジャクシ”の時期

- ・子どもは落ち着かない生き物
- ・子どもの本質を知ることが重要
- ・男子のツノを折らない

“若いカエル”の時期

- ・いろいろな大人が本音で語ることが大切
- ・基礎の基礎をきちんと言ってくれる④が必要

○社会で活躍する人の共通点は「お母さんがいつもニコニコしていた」

子どもたちを笑顔にするには、まずお母さんが笑顔でいることが大事である。しかし、「お母さんのゆりかご」であった地域のつながりが現在は希薄になり、イライラしてしまうお母さんが増えた。



お母さんがいつもニコニコしているために

- ・家庭内では、男女が互いに異性の特徴を学び、思いやりをもって接する
- ・お母さんが穏やかでいるためには、ママ友など相談できる相手や、仕事や好きなアイドルなど、育児や家事以外に没頭できる事を持つことが大事

○お母さんを学校の味方にするには

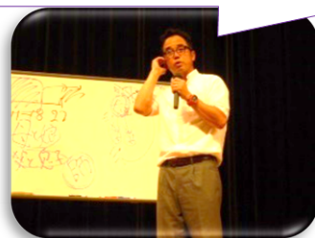
- ・「あなたの味方です」と、お母さんの懷に飛び込む話し方をする
- ・きれいごとではなく、本音で語ることも必要
- ・1日の授業の1エピソードを A4 用紙にまとめ、子どもの様子をお母さんに伝えると、心に響く言葉になる

子どもたちに逆境をはねのける力を育てる

子どもにとって、逆境も必要な経験である。もめごとや失敗は人生の肥やしであるとならえ、乗り越える経験をさせたい。失敗をさせたくないからといって、負の経験を除去したら、人は育たない。

先生方へのアドバイス

- ・子どもができなかった問題は、子ども自身の力で解けるようにする
- ・一人の先生だけでできないことは、仕組みを変え、組織で問題解決をする
- ・形式化された研修は見直していく





自然観察会

～郷土の豊かな自然を知ろう～



自然観察会は「小田原市小中学校理科副読本『小田原の自然』活用講座」として平成14年度から実施し、今年で14年目になります。昨年度は、通算100回目の開催を迎えました。講師は、小田原市立小・中学校の先生と元先生、自然観察指導員の方です。自然観察会を知っていたために、各回の様子を紹介します。

4/18 平地の自然 あぜ道の花や虫・メダカを観察しよう



市街地のアスファルトの間に咲く草花や、田んぼに生きる草花等を観察しながら、春の七草や植物の名前の由来、植物の生き延びるための知恵など、わかりやすい説明が好評でした。

ぼくは虫をいろいろ見つけました。アマガエルやベニシジミとかを見つけた。いろいろな花を見て楽しかったです。(小4)

6/6 ツバメの観察会 ツバメの観察・調査に参加しよう



定点コースを決め、ツバメの個体数や種類、巣の数を観察しました。観察・調査後、グループごとに調査結果を報告しました。参加した全員の子どもが感想や意見を発表し、貴重な体験ができました。

ヒメアマツバメの巣はツバメの巣とはちがってとても高いところに集団であったので、面白いなと思いました。(中1)

8/1 丘陵の自然 夏の虫を探そう



辻村植物公園内の4ヶ所(梅林草むら、林の中、山頂、コナラ・クヌギ林)を順に回って、観察・採集を行いました。昆虫が多い季節なので、いろいろな昆虫を観察することができました。

この観察会で一番驚いたことは、バッタの仲間がものすごくたくさんいたことです。特に梅林ではキリギリスの仲間がたくさんいました。(小5)



根府川駅を出発し、之浦海岸で観察を実施しました。参加者6グループに分け、観察・採取・解説・説明・調査等を行いました。班内での発表の、採取物のリリースなど、観察時のマナーも学びました。

バフンウニ、ホンヤドカリ、ヤツデヒトデをつかまえました。最後に生まれて初めてアメフラシの卵のかたまりを見られてよかったです。(小4)

6/20 酒匂川の自然 河原の岩石・動植物を観察しよう



「小田原の自然」を片手に、酒匂川の河原にある典型的な岩石7種を集め、標本を完成させました。標本作りに取り組みながら、岩石の特徴が理解できました。

酒匂川の石を見るだけで、この地域の成り立ちや歴史がわかるのはすごいと思った。河原の植物や鳥などの生態系も知ることができた。(中3)

毎回、小田原の自然の豊かさを知ることができる自然観察会は、驚きの連続です。
教職員の方々の参加もお待ちしております。





郷土の偉人である二宮尊徳翁の事績や教えについて研修を深める「尊徳学習研修会」を8月21日に実施しました。元尊徳記念館館長の中山幸夫先生の講話を聴いたあと、グループに分かれ、「みんなで考えよう尊徳学習＜授業展開案の検討＞」「子どもに伝えたい尊徳翁」というテーマで話し合いをしました。

◆尊徳学習の導入では、尊徳翁への興味を持たせるための工夫が大事

- ・金次郎像や、銅像の写真を見せて、問いを投げかける。
- (例)「歩きながら本を読んでいる姿を見て、どう思う」「金次郎さんが持っている本には、何が書いてあるんだろう」
- ・地域にある金次郎像を訪ね、なぜそこに金次郎像があるのかを探る。

◆体験も大事

- ・わらじ作り、米作り、菜種油をしぼる等、体験しながら学んでいくことによって昔の人の苦労や努力がわかる。

◆体験も大事だけど…教えにもふれたい

- ・尊徳翁が行った事実だけでなく、その行いの奥にある尊徳翁の思想に気付かせたい。
- ・児童生徒が調べ学習を進める中で、「金次郎さ

んってすごい」と感じられるとよい。

◆中学校では

- ・道徳の時間に偉人について取り上げるときに、尊徳翁を題材にする。
- ・「道歌」（教えを短歌で表したもの）カルタを作る。
生徒がよく目にする場所に道歌を掲示し、自分が「いいな」と思った教えをカルタにする。カルタを作ることによって、そのよさを生徒同士が共有できる。

市内の小学校では、4年生を中心に「尊徳学習」が行われていますが、その後も尊徳翁にふれる機会を持つことが大事であること、また、校内の掲示物等を工夫して、児童生徒が普段から尊徳翁の教えにふれられるような環境整備の大切さも話題になりました。

見る、感じる、学ぶ、やってみる！

～今後の教育研究所事業を紹介します～

◇第2回学習指導法研修会 教科指導力の向上を図る研修です。

教科・講師	期日	授業者
《国語》講師 十文字学園女子大学 教授 富山 哲也 先生	11月10日（火）	城北中学校 相原 由佳 教諭
《算数・数学》講師 横浜国立大学 教授 池田 敏和 先生	11月20日（金）	早川小学校 佐々木 望 教諭

◇第5回おだわら未来学舎 「教師の実践力をみがき、教育への情熱を高める」

内容・講師	期日	場所
『これからの外国語活動のあり方』 国立教育政策研究所教育課程調査官 直山 木綿子 先生	2月9日（火）	小田原市役所 大会議室

◇自然観察会 副読本「小田原の自然」を活用したフィールドワークです。参加者はその都度募集しています。

テーマ	期日	場所・時間
小田原の地質・地形を調べよう	12月5日（土）	弓張の滝（午前中）
酒匂川水系の野鳥（冬の野鳥を見よう）	1月23日（土）	蜷田～狩川（午前中）

小田原教育 第123号 発行日 平成27年10月23日 発行者 教育研究所長 大場 得信
発行所 小田原市教育研究所 〒250-8555 小田原市荻窪 300 番地 TEL0465-33-1730

